

K

「楓の風」らしい看護の取り組みを発信



在宅療養支援

楓の風

KAEDE TIMES 2026

在宅生活を支援するー私たちの試行錯誤



ー在宅を支える全てのみなさまへー

私たち、「楓の風」スタッフが、どのような想いで在宅支援をしているのかを、一人でも多くの方に知っていただきたい！と思い、

「楓の風」らしい取り組みをご紹介します、ニュースレターをはじめました！



Case 8

2026 Vol.8

今回ご紹介するのは、限られた時間の中で「家で生きること」を選び抜いたご主人と、そのご家族の支援をさせていただいた事例です。
私たちが寄り添ったのは、医療的判断だけでなく、「ご本人にとっても、ご家族様にとっても本当の意味で納得できる時間」でした。

ケース

家で生きることを選んだご本人と家族を支えるために...

40代男性。脳腫瘍を患っておられました。奥様と、10代のお子様が2名の4人家族でした。
限られた時間の中で、「家で生きる」ことを選択されました。

訪問看護が開始となり、ご本人から看護師に伝えられたことは、

「看護師さんには、妻の相談相手、話し相手になってほしい。
僕との生活は不安だらけだろうから」

というお言葉でした。

具体的な関わりと支援の姿勢

ご主人のご要望通り、
訪問看護の時間の多くは、ケアよりも“奥様のお気持ちを聴く時間”に充てられました。
それは、在宅療養を続けるために、**欠かせない支援**でした。
私たちは、常にご家族様と対話をし、向き合い、ご意向に寄り添うために全力を尽くしました。
時には、ご本人のご意向と、医師から進められる医療的な対応とが噛み合わないように思えることもありました。
しかし、そんな時こそ、**なぜ医師がそのような提案をするのか、それを受け入れない場合にどのような結果が想定されるのか**について丁寧に説明することに努めました。
また、看護師だからこそ気付ける、**状態の変化と残された時間**について率直にお伝えしました。

奥様からのお言葉

その後、残念ながら状態は悪化し、最期はご自宅でお看取りをすることになりました。
状態をこまめにお伝えしていたため、**最期はご家族全員が側にいることができました**。
お看取りのあと、奥様はこんな感動的なお言葉を、看護師に伝えてくださいました。

「正直に伝えてくれたから、みんなが間に合いました。
家で看取れたのはこのチームがいたからです。不安だったけれど、やり切れました。
100%満足できた介護でした。」

